

第54号

● 目次 ●

巻頭言：東北アジアの造山帯の延長問題	1
最近の研究活動	2 - 5
著書紹介	5
センター新任紹介	6
センター客員教授紹介	7
活動風景：「内藤湖南」は大丈夫だが「三条実美」は深手だ — 研究環境の現況 —	8
編集後記	8



東北アジアの造山帯の延長問題

東北アジア研究センター副センター長 石渡 明



今回は、私の専門分野に少し立ち入った話をさせていただき、巻頭言としたい。日本列島のような弧状列島（島弧）でもアジア大陸でも、地球上の大きな陸地はどれも、数億年の時間をかけて造山運動によって形成されてきたものである。造山運動は、地層の堆積・付加、断層・褶曲、マグマ活動、変成作用などによって大陸地殻をつくる作用である。この作用はプレートの衝突帯で行われるので、それは長く伸びた帯状の地域（造山帯）をなす。東北アジア地域には日本を含む環太平洋造山帯とそれにほぼ直交するいくつかの大陸内造山帯が存在する（図1）。後者の中では、モンゴル・オホーツク（中央アジア）造山帯が最大のものであるが、日本列島の形成に最も深く関与したと考えられる大陸内造山帯はその南の秦嶺・大別・蘇魯造山帯である。華北と華南の二つの大陸地塊が2億5千万年前（古生代・中生代の境界）にここで衝突合体し、この造山運動でそこ

にヒマラヤ級の大山脈ができたと考えられる（現在は侵食によりほとんど準平原化している）。日本列島の大部分を作っている中生代の地層は、この山脈から海へ流れ出した砂や泥が固まったものであり、我々の大地は中国の大山脈の「おこぼれ」でできていると言える。

さて、この大山脈の東端は山東半島であるが、その東方延長がどこに続くかは学者の間で意見が分かれており、今も論争が続いている。常識的には、山東半島の線をそのまま東へ伸ばすと朝鮮半島の38度線付近を通るので、朝鮮半島北部（北朝鮮）は華北（中朝）地塊に、南部（韓国）は華南（揚子）地塊に属すると考える人が多い。しかし、華北と華南は衝突以前の古生代の地層の様子が全く異なり、それぞれ特徴があって、意外なことに朝鮮半島は南部を含め全部が華北の特徴を示す。そこで山東半島の延長は朝鮮半島に上陸せず、南へ迂回して石垣島に達し、そこから日本の造山帯へ続く、という説を私が約10年前に発表した（図1）。この説は、「朝鮮半島を統一してくれてありがとう」と言ってくれた韓国の研究者をはじめ、中国、米国などの複数の研究者から支持されている。しかし、最近日本のあるグループが、この説は「完全に間違っている」と論文に書き、こちらも反論して討論になった。何億年も前の仙界の話のようではあるが、話をする人間の方は生臭い。

学問は無謬の偉い先生が提供してくれるものではなく、半可通の我々のような連中が苦しんで議論しながら作り上げて行くものだろう。本センターは毎年多数の研究発表会やシンポジウムを提供しているが、活発な議論の場から大きな学問的成果が出ることを期待する。

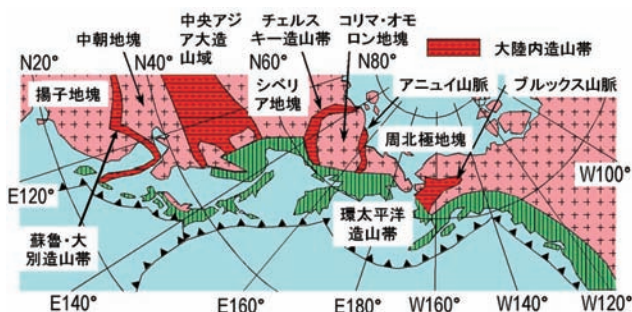


図1. 東北アジア～アラスカの環太平洋造山帯と大陸内造山帯（石渡・磯崎，2011；『東北アジア 大地のつながり』，東北アジア研究誌本，東北大学出版会より）。

最近の研究活動

第13回特別推進研究

「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

2012年6月23日(土)、東京・駒込の東洋文庫にて、第13回の特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」の国内研究会を東北アジア研究センターのプロジェクト「東アジア出版文化」研究ユニット及び共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」と共催で実施しました。東洋文庫は、三菱財閥の岩崎久弥が蒐集した古典籍をもとに開設されたアジア・中東イスラームなどの地域を中心に研究を行なう日本を代表する東洋学関係研究所の一つです。幸いにも若手研究協力者の尽力によって、当方の研究テーマにふさわしいこの場所で研究会を開催する運びとなりました。



東洋文庫所蔵文献共同調査の風景

今回は、研究成果発表と東洋文庫所蔵文献及びミュージアムの共同研究調査という二本立てで実施しました。研究発表は、私磯部彰が、『昇平宝筏』の構成と鈔本二種—大阪本と北

京故宫本との相違—という題目のもとで、2時間の報告をしました。清朝の宮廷演劇の作品の一つである『昇平宝筏』は、『西遊記』に取材した長編戯曲で、今日、いくつかの鈔写本が伝わります。一般には、北京故宫博物院に所蔵されるテキストの他に、大阪府立中之島図書館に四色写本があります。大阪本は乾隆帝用に作られた上覧本で、故宫本の内容とは大きな相違があります。大阪本は小説『西遊記』に近く、故宫本はその内容を改め、康熙帝のジュンガル攻略、ガルダン追討を新たに取り込み、国家儀式用としての色彩を強くし、清朝初期の偉業を東アジア各国の使節に示すことを意図しました。この改変は、乾隆帝の意向によるもの、もしくは、嘉慶帝自身の指示で行なわれた可能性があります。康熙帝のガルダン征討という東北アジアに係る点は、共同研究をする歴史学者からのアドバイスをいただきました。

東洋文庫本の共同調査では、日本の五山版、朝鮮朝の宣賜本、王国維旧蔵元曲選など、著名な古典籍のいくつかを、参加者全員で拝見し、デジタルデータとしても入手することが出来ました。(磯部 彰)

高倉浩樹准教授が、2012年度(第27回)大同生命地域研究奨励賞を受賞

去る7月13日、大阪の大同生命保険株式会社本社において、高倉浩樹准教授が、大同生命地域研究奨励賞を受賞しました。

大同生命地域研究賞は、国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担う「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するために、財団法人大同生命国際文化基金が1986年に創設したものです。創設以来、国内外で著名な業績を挙げた研究者が表彰されてきました。奨励賞は、地域研究の分野において新しい展開を試みた研究者に贈られます。

高倉氏の受賞は、「シベリア地域研究における新局面の開拓と展開」によるものです。発表された受賞理由のなか



贈呈式にて受賞者全員での記念撮影

で、シベリアでの人類学的フィールドワークの先導的役割や地域間比較を通じた理論的考察、国際発進力の高さ、学際的共同研究の組織化におけるリーダーシップなどが評価さ

れました。

贈呈式では、多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者に送られる地域研究賞にオセアニア研究の青柳真智子氏(立教大学名誉教授)、また奨励賞のもう一人にインド研究の田辺明生氏(京都大学教授)、さらに対象地域を通じて国際親善、国際貢献を深めるうえで功労のあった者に対する地域研究特別賞に、森本喜久男氏(クメール伝統織物研究所代表)が表彰されました。



受賞の挨拶をする高倉氏

大同生命国際文化基金では、地域研究を「人文科学、社会科学あるいは自然科学のいずれの分野を問わず、発展途上地域または周辺・辺境地域における人間の営みについて、地域に密着した実証的手法により解明を試みる学術的研究を言う」と定義しています。同基金は、これ以外にアジア諸国の現代文芸作品の日本語翻訳出版や、日本の文芸作品のアジア各国語への翻訳出版事業を行っています。さらに、教育支援事業として学校建設なども実施しており、地域研究を通じた文化交流・教育支援を幅広く行っています。

ロシア・スラブ系データベース ‘Integrum’ の導入について

今年の7月から本センターは、「インテグラム (Integrum)」という、ロシア・スラブ系データベース (<http://aclient.integrum.ru/gate/?name=tohuni>) を導入した。このデータベースは、ロシアの中央および地方の新聞・雑誌記事を集約した検索システムである。主要紙については、1990年代以降の記事が収められる。従来、本センターは、シベリアのノヴォシビルスクや他のルートを通じて、ロシア語の新聞・雑誌を購読してきたが、ロシアからの郵送期間も考えると、閲覧するには2カ月を要した。他方、新聞・雑誌を購読すると、製本費や保管スペースも次第に増える。インテグラムの導入により、インターネットを通じてロシアの新聞・雑誌がリアルタイムで閲覧できるだけでなく、過去記事の検索も容易になるため、ロシアの新聞・雑誌を本センターで製本・保管する必要はなくなり、製本経費や保管スペースの問題が解消された。

インテグラムの使用料は年間約40万円になるが、ロシアの主要紙・雑誌がほぼ全て網羅されており、全ての定期刊行物を一組織で購読するよりも遥かに安価になる。このデータベースは今後、ロシア研究者にとって必要不可欠な道具になる。インテグラムの契約は今回、東北アジア研究センター単独で行ったが、そのサービスは全学に開放され、他部局のロシア研究者や、ロシアに関心を持つ学生・院生も利用できる。あらゆる分野で学術雑誌の電子ジャーナル

化が進行するが、外国研究に関わるデータベースの拡充も進む。今回はロシアのデータベースを導入したが、韓国や中国でも同様のデータベースが提供されている。今後、本センターは地域研究のインフラ整備のため、韓国や中国のデータベースも導入する方向で検討を始める。(塩谷昌史)



(インテグラムで検索した、2012年3月5日の新聞記事 (Kommersant))

中国学術情報データベース ‘CNKI’ の導入について

7月末より、東北アジア研究センターでは中国学術情報データベース (CNKI: China National Knowledge Infrastructure) の利用を開始しました。

CNKIは中国が1999年より国家プロジェクトとして整備した、中国国内の学術情報をデジタル化して統合し、広く内外に公開するためのオンライン・システムです。CNKIは複数のデータベースから構成され、自然科学から人文社会科学にわたる新聞・雑誌・学位論文・年鑑・会議録・法律・工具書など広範な情報データを含んでいます。今回はその一部である中国学術雑誌全文データベース (CAJ: China Academic Journal) のうち、「中国民族與地方史志」、「中国近現代史」、「民族学」の三分野が利用可能です。これらの分野に関する1994年以降の膨大な学術雑誌掲載論文データを検索・閲覧することができます。CNKIは強力な検索機能を備えており、雑誌バックナンバーからの検索だけでなく、キーワード入力による横断的検索も可能です。また検索結果のページでは関連論文のデータも一覧表示され、効率的な情報収集が可能になっています。

これまで中国の学術雑誌の多くは日本での入手・閲覧が困難で、それらの所収論文を学術研究で十分に引用・活用することができませんでした。特に前述の三分野は研究対

象の多くが中国の辺疆地域であり、関連論文が地方の大学・研究機関の雑誌に掲載されることが多いためにこうした傾向が顕著でした。本データベースの利用により資料収集上のボトルネックが大幅に改善され、中国の最新の研究動向を踏まえたより精度の高い調査研究を可能にするという点で、その有用性は非常に高いと言えます。

CNKIの契約主体は東北アジア研究センターですが、全学で利用できるようになっており、東北大学の職員・学生であれば誰でもCNKIにアクセスできます。ぜひ、このデータベースを調査研究でご活用ください。なおCNKIへのアクセスおよび利用の方法に関しては、本センターHPの新着情報 (<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2012/news120729.html>) を参照して下さい。(上野稔弘)



CNKIのロゴマーク

東北大学校友上海交流会と中国人学生向け 地中レーダー集中講義

地中レーダー（GPR）技術は地上のアンテナから地下に電波を送信し、非開削で地下の様子を知ることができる計測技術です。私たちはGPRの新しい装置の開発と応用についての研究を続けており、1000mの井戸の中で周囲の地層を計測するボアホールレーダーや、地雷検知用レーダーの分野では世界の最先端装置の開発に成功しています。カンボジアでは80個以上の地雷検知に貢献しています。乾燥地域では電波の地下への浸透性が高いので、モンゴルにおける地下水調査や、エジプトの砂漠の下の地形調査などの応用も行ってきました。一方上海、北京を始め中国各地では道路、トンネルなどの土木工事が大規模に行われており、GPR技術の需要が急激に高まっています。

中国東北部、長春市の吉林大学の招聘で私は2008年、2010年にGPRの集中講義を大学院学生を対象に行いました。同大学には現在私の研究室で博士学位を取得した劉四新、鹿琪さんがそれぞれ教授、副教授を務めており、またセンターで助手を務めた馮暉さんと研究員曾昭発さんも教授、さらに客員教授に招聘した劉財先生が地下計測学部の学部長（学院長）を務めています。

おおよそ2年ごとに中国で集中講義を開催していますが、昨年は震災の影響もあったため中国での集中講義開催は断念しました。その代わりに2011年11月に中国人大学院学生を対象とするGPR教育と、将来的に東北大学へ留学する学生を発掘する目的で、GPRの集中講義を、京都、奈良、仙台と場所を移しながら開催しました。今回は大学



復旦大学の会議に集まった東北大学卒業生など

間学術交流協定をもつ大学から学生を日本に短期招聘する日本学生支援機構（JASSO）のプログラムを利用し、吉林大学ならびに復旦大学（上海）より7名の大学院学生が参加しました。奈良では奈良文化財研究所と協力し、隣接する平城京跡において、実際の地中の礎石を検出する地中レーダー計測のデモンストレーションを行いました。その後、仙台に移動し、地中レーダー信号処理の集中講義を行いました。その上で学生が自らレーダーを操作して取得したデータを実際に処理し、内容を発表する一連の演習を実施しました。本集中講義に参加した吉林大学の修士課程学生は、その後文部科学省国費留学生に採用され、2012年10月から東北大学に留学することが決まりました。

一方今年に入り、2012年6月、上海・同济大学キャンパスで、国際地中レーダー会議が開催されました。この会議は2年に一度、世界各国で開かれる、地中レーダーにテーマを絞った国際会議としては最も重要なもので毎回200名を超える参加者があります。今回の会議には東北アジア研究センター佐藤研究室で研究を行った留学生、センターが招聘した客員教授、外国人研究員、またセンターに勤務経験のある助教、教育研究支援者が中国、韓国から10名ほど集まりました。これに私たちを加え、また東北大学中国校友会などの広報活動で集まった中国人大学院学生、研究者総計40名ほどで地中レーダー技術に関する特別セミナーを開催しました。

揚子江をくぐり抜ける数本の巨大なトンネル、数年後には世界最長となることが予定され建設が進む地下鉄など、現在の上海では地中レーダーを利用した開発が非常に活発に行われており、今回のセミナーでは海底トンネルのコンクリートの保全調査、土木工事の基礎調査など中国が必要とする最新技術としての応用から、月ならびに火星探査衛星に搭載される地中レーダーの設計からデータ解析まで、



東北大学校友上海交流会

日本東北大学坐落於仙台。在过去的百年，鲁迅等一大批学者教授曾在这里学习工作。目前东北大学与国内25所知名大学建立广泛的国际交流和共同培养协议。为进一步推动东北大学的学术影响及中日友好，近二十名来自海内外的校友将齐聚上海同济大学，举行学术交流会。会议将由东北大学东北亚研究中心主任佐藤源之教授介绍东北大学近况，15名国内外教授学者将做简短学术报告，报告主题主要围绕探地雷达技术及其在土木、环境、地质、考古等方面的应用。热烈欢迎广大学者、同学，尤其是有志前来东北大学求学的学生参与我们的交流活动。

时间：2012年6月7日 16:00 ~ 19:00
地点：四平路1239号 同济大学 中法中心 401

报告人名单

- 佐藤源之（日本東北大学）
- 高橋一徳（日本東北大学）
- 小林敬生（韩国 KIGAM）
- 趙誠俊（韩国 KIGAM）
- 海老原聡（日本大阪電気通信大学）
- 金亚秋（復旦大学、院士）
- 孔凡年（挪威地质研究所）
- 方广有（中科院）
- 曾昭发（吉林大学）
- 刘四新（吉林大学）
- 馮暉（吉林大学）
- 鹿琪（吉林大学）
- 周輝（中国矿业大学）
- 趙建国（中国矿业大学）
- 陈炯（伊頓上海）



東北大学校友上海交流会

東北アジア研究センターのOB・OGが活躍して得られた成果が報告されました。

例えば今回セミナーに参加された金垂秋先生(復旦大学)は2005-2006年にセンター客員教授として赴任されましたが、現在中国が計画する月衛星に搭載する地中レーダーの研究計画の責任者を務めておられます。センターで研究機関研究員を務めた周輝さんは長崎大学を経て現在中国石油大学で副学部長の要職にあります。こうした方々が私たちの地中レーダーの研究を中国側でも大いに発展させてくれています。

(佐藤源之)



平城京跡での地中レーダーデモンストレーション

著書紹介

センター関連出版物

○学術図書

- 『三合語録』における満洲文字表記モンゴル語の研究
／ スチンバト著(東北大学出版会) 2012年2月

本書は、日本学術振興会平成23年度科学研究補助金(研究成果公開促進費)を受け、博士学位論文『三合語録』のモンゴル語の研究』に加筆・修正を加えて刊行したものである。

言語は様々な変化を被って様々な形跡を残しながら独自の歴史を築く。モンゴル語に関して、『元朝秘史』に代表される中世モンゴル語の言語的特徴はほぼ確定されているが、近代に入って、時代的に、また地域的にどのような変化を被って現代に至ったのか、その言語状態の詳細は不明である。こうした問題意識を出発点として、本書では、19世紀前半に属するモンゴル語の教科書である『三合語録』の満洲文字表記モンゴル語を対象に、各テキストの比較、言語学的検討、文献学的考察といった実証的なプロセスによって、同モンゴル語の満洲文字表記の性格と、近代モンゴル語における位置付けを試みた。

清朝道光九(1829)年の「序」をもつ『三合語録』のモンゴル語(102条の会話文/610頁)は、従来のモンゴル語の研究・論考において、近代モンゴル「口語」の希少な資料の一つとして取り上げられてきたが、その言語学的特徴はほとんど明らかにされていなかった。それに対して、本研究では、『三合語録』のモンゴル語の実態とはモンゴル語のオイラート方言に基づくオイラート文語の満洲文字表記であることを論証し、当時のオイラート文語やオイラート方言の特徴を究明する上で貴重な資料であることを明らかにした。

○センター報告

- ・5号 『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集』 / 高倉浩樹・滝澤克彦・政岡伸洋編 2012年6月

本書は、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会から受託研究として委託された「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」に関わる報告集である。2011年3月11日に発生した東日本大震災によって宮城県の沿岸部は津波による甚大な被害をうけた。本調査は、まずは被災地における民俗文化とくに芸能や祭礼、生業やその習俗などの状態がどのようになっているのかを明らかにし、さらに被災後の地域社会復興プロセスに政策的に関与・推進する行政や地域社会に対して、民俗文化の被災状況とその復興過程の現状についての概況を提示しようとするものでもある。このことを通して地域社会・行政そして関連分野の研究者などが、民俗文化が被災後の地域社会再生においてどのような役割を担うことができるのかを考察・検討するための資料となることが目指されている。

プロジェクトには、文化人類学・民俗学・宗教学・環境社会学などの様々な分野の研究者に補助調査者の学生たちを加えた計29人によって、宮城県沿岸部の山元町から気仙沼市までの20地域を対象に2011年10月から2012年3月までを調査期間として実施された。その結果、延べ133人に対する聞き取り調査が行われた。本報告集には、その一次資料である75の調査報告が掲載され、当該期間における被災地の無形民俗文化財に関する全体的な共時的状況が明らかにされている。

(滝澤克彦・東北大学大学院文学研究科専門研究員)

● センター新任紹介 ●

産学官連携研究員 盧 向春

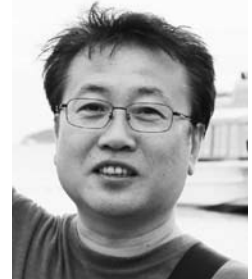
盧 向春（ル コウシュン）です。明日香教授の研究室で産学官連携研究員として環境省の戦略研究プロジェクト「東アジアにおける広域大気汚染の解明と温暖化対策との共便益を考慮した大気環境管理の推進に関する総合的研究」を中心にして研究を行っています。研究テーマは「温暖化と大気汚染物質削減の統合政策に関するコベネフィット分析」です。

コベネフィットが存在する原因はエネルギー生産と消費など人類社会の経済活動が気候変動と大気汚染を同時に引き起こすことです。これに関する科学的認識がますます深化しています。経済成長段階の違いによって各国の気候変動リスクと大気汚染経済損失に対する認識、あるいは評価の分岐が生じます。このような差異を明確化することは意義が大きいものの容易ではない課題だと思います。私たちの研究はエネルギーの生産と消費を中心においての社会・経済活動が気候変動と大気汚染の共通対策の策定を目指してグローバル的な気候変動と大気汚染を含む経済学的モデルを構築し、温暖化排出物質と大気汚染排出物質に対するEOP（End of Pipe）排出権市場導入を想定し、対応する政策シナリオのシミュレーションを行い、最善と考えられる政策を提案します。現在シミュレーションまでの分析を完成しました。そして次のような初歩的な結論を得ました。(1) グローバル気候変動政策（GCC）において共便益分析

は非常に重要であることが分かった。コベネフィットを考慮しなければGCC政策は日本のような先進国であってもポジティブな便益を得ることができない。したがって、共便益概念は気候変動交渉においても広く応用されるべきである。(2) 総合政策シナリオは最適な経済便益をもたらすことができる。したがって、気候変動政策と大気汚染政策の同時実施は重要である。(3) 大気汚染政策より気候変動政策から先に利益を得るのは先進国（日本）である。対照的に、中国の収益曲線には日本よりタイムラグ（time lag）があり、長期的分析が必要である。

日本に留学に来て、そして研究者として働いてそろそろ15年目に入ります。昨年の3.11東日本大震災の時、出張のため、日本に不在でした。テレビに映った仙台の画面を見る時に感じた「怖さ」より「心の痛み」が、今も記憶に刻み込まれています。言葉で言いがたい東北、仙台に対する感情を再び感じてしまいました。

これから、研究に一層精進し、自らにできる限りの努力によって、少しでも東北の復興に貢献してまいりたいと考えております。



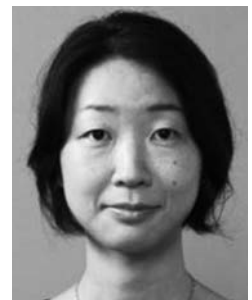
教育研究支援者 巽 由樹子

2012年8月1日に東北アジア研究センターの教育研究支援者に着任しました、巽と申します。ロシアの出版史を専門分野としています。

かつてロシア・ソ連の出版研究は、書物がナロード（民衆）をいかに科学的に啓蒙し、そのことがどのように革命の成就に役立ったかに関心を向ける傾向がありました。しかし、はたしてロシアでは教育啓蒙的で真面目な書物ばかり出版されたのか、また、そのような本を読んだとしても、読者は書き手の意図通りに内容を受け止めたのだろうかというのが、学部時代、ロシア史を勉強しはじめた頃に抱いた疑問でした。（たぶん、自身が不真面目な学生だったのだと思います。）そのうちにある研究書から、ロシアでは19世紀後半から、現代のグラフ雑誌の前身にあたる絵入り週刊誌が刊行され、それが20世紀初頭には、約50万部を売り上げる主要メディアとなっていたことを知りました。以後、そうした絵入り週刊誌について、書き手や発行者などの出版機構、読者の階層構成や地理分布、記事内容の特質を分

析し、「真面目な読書」とはやや異なる出版文化から、19-20世紀ロシア史を理解することに取り組んできました。

しかし、国内外の多様なメディアとの比較、統計データの処理の仕方、連載小説などフィクションの扱い方、記事中のシベリア・極東アジア・イスラーム圏などの諸民族の表象の分析方法など、様々な課題を前に試行錯誤を続けています。そのため、出身は歴史学の研究室ですが、文学の研究室に在籍した時期もあり、また、社会学などの隣接諸分野を勉強する必要性を日々感じています。今回、本センターのプロジェクト研究部門に所属できることを、知見を広げる機会として大変嬉しく思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



● センター客員教授紹介 ●

ウルジーバヤル（烏力吉巴雅爾）教授

2012年6月1日、中国中央民族大学のウルジーバヤル（烏力吉巴雅爾）教授が東北アジア研究センターの客員教授として着任された。ウルジーバヤル先生は1949年のお生まれで、内モンゴル西部のバヤンノール盟出身のモンゴル族である。現在は中央民族大学の中国少数民族語言文学学院の蒙古語言文学系の教授を務めている。専門は、モンゴルとチベットの文化関係史、モンゴル文化史、モンゴル文献学、等々である。

先生はこれまでに『モンゴルとチベットのゲセル物語の関係』（民族出版社、1991）、『モンゴル族のチベット語文学研究』（1996）、『モンゴル・チベット関係史大系・宗教編』（2001）、『モンゴル・チベット文化関係研究』（2004）、および『モンゴル仏教史（訳注）』（1990）などの著書をはじめとして多数の著書・論文を公刊されている。

本センターに滞在中は「モンゴル、チベット言語文化の相互接触に関する研究」をテーマとして研究を行い、東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニットの活動に参加



しているほか、栗林研究室のモンゴル人留学生の研究に興味を示されてゼミナールに積極的に参加されている。

先生にとって今回は初めての来日であるが、研究三味の毎日の中で、奥様とともに仙台の初夏と梅雨、夏の移りゆく自然を楽しまれている。8月31日まで滞在される。

（栗林 均）

マガリー コッホ准教授（Dr. Magaly Koch）

このたび東北アジア研究センターに客員准教授として滞在するマガリー・コッホです。私は地質学を専門とし、熱帯地域での地下水や環境変動をリモートセンシングと地理情報システム（GIS）を利用して解析しています。例えば水資源予測（スーダン、エジプト、オマーンならびにアラブ首長国連合）、湾岸戦争の環境影響評価（クエート）、湿地帯の衰退（スペイン）、枯れ川の増水予測（アラブ地域）、景観と文化発展の関係（エチオピア）、密林におけるマヤ文明遺跡の発見（グアテマラ）などについて研究してきました。

現在は米国—エジプト共同研究（NSFによる支援）で日本の地球観測衛星ALOSの光学ならびにマイクロ波センサを併用したエジプト・西アスワン地域における土地利用と開発に関する研究、また最近ではエジプト・エルガバラ平原における土壌と農業開発に関する共同研究のアメリカ側主任研究者を務めています。

私は1986年にケルン大学（ドイツ）で修士号（地質学）、ボストン大学において地下水学のためのリモートセンシング応用で博士号を1993年に取得した後、マリー・キュリー奨学金をEUから受けてバルセロナの国立研究機関CSIC（スペイン）でポスドクを過ごしました。現在はボストン大学リモートセンシングセンター研究准教授であり、タフツ大学講師も務めています。

東北アジア研究センターに滞在する3ヶ月間に佐藤教授

と協力し、エジプトの環境計測に関する研究を進めるつもりです。私は20年以上、乾燥地域での光学センサの利用に多様な経験を持っていますがマイクロ波レーダー、また地中レーダーの利用は比較的最近開始したテーマです。元来地質学が専門なので、地中レーダーのように地下構造計測ができるセンサの利用に関しては特に興味をもっています。新しい衛星ミッション（SMAP, Tandem-L）などではレーダーの利用が予定されており、熱帯、乾燥地域での地表ならびに地中計測への応用が期待されています。こうした分野で私が行ってきた研究は、レーダー技術と光学センサ技術を組み合わせて行う地下水計測などで重要な役割を果たすと考えています。現在NARSS（エジプト宇宙局）と協力して2012年1月にエジプト南部、西アスワン地域での分光放射計と地中レーダーを利用したフィールド調査を計画していますが、これは光学センサ搭載衛星ならびにレーダー衛星の地表検証実験に相当します。こうした研究手法は広く乾燥地域の環境評価に利用できるため、東北アジア地域での研究につなげたいと考えています。



（翻訳：佐藤源之）



「内藤湖南」は大丈夫だが「三条実美」は深手だ — 研究環境の現況 —

東北アジア研究センター 教授 磯部 彰

内藤湖南や三条実美は、歴史を知る者ならば必ずその名を耳にしたことがある人物である。ここで挙げた内藤湖南と三条実美とはその人自身ではなく、兩人によって揮毫された扁額のことである。震災でセンターのある川北合同棟が被災してから一年半が経ち、倒潰した6・7階のペントハウスに置かれていた「内藤湖南」扁額は、その名前の上にあいた穴も修復されて戻って来た。一方、美しかった「三条実美」の扁額は、射撃的のような状態のまま、今も廃屋に近い別の場所に置いてある。そのため、「三条公」は深手だと言ったのである。

東アジア出版文化及び清朝宮廷演劇文化などの国際的大型プロジェクトでは、東アジア・ヨーロッパの文化資料を研究用として蒐集し、教育にも活用して来た。オープンキャンパス時には、明代の木彫観音を中心に、北齊・隋代頃の四体の武人石彫、清代の龍袍、江戸写本の源氏物語絵巻、ナポレオン文書、ハムラビ法典金板、リッター作水彩画「戦場図」、仿ラファエロ聖母像、「最後の晩餐」古典模写など、東西文化資料七十点あまりを展示したこともあった。

国際会議や市民向けイベント、研究・教育に使われるこれらの資料は、三ヶ所に分散して所蔵し、その中で最も貴重と言われる部類に属する資料は、合同棟に保管していた。ペントハウスが潰れ、恐らくすべて廃品となったと思っていたが、昨年五月になって、初めて資料を見た時、木彫の観音は無事で建物の隅にあった。しかし、石彫武人像は頭

部が砕かれて戦没の状態であった。屏風や日本絵画、西欧画など、すべてが散乱はしていたが、資料の大半は軽いものが多いためか文字通り軽傷であった。重傷であったのは「最後の晩餐」で、文字通り最後になった。ティッシュより軽い？ 宋版経や源氏物語写本、金槐和歌集、源三位頼政集、明刊元曲選などは、彼方の隅に飛び、雨漏漬けになって、折しも五月の暑気でカビも生え、廃仏毀釈の世に加えて、「源実朝」も「源頼政」も歴史と同じ道を辿って討死をし、ついには賞味期限が切れた乾燥豆腐に変化した。

一方、研究室や共同資料室にあった書籍も、昨年六月の台風で水上書架の状態となり、したたり落ちる棚からの避難で使える状況ではなくなった。しかし、研究や教育は本務であるので、民間のオフィスを借用して間断なきようにし、日本学術振興会へ「特別推進研究」の活動報告書を提出した後、八月には最終ヒアリングに臨み、九月と一月には大学院入試など、平成23年度も例年通りに過ごした。この点は、センター全員の仕事ぶりと同じで、改めて言う必要もないことではある。

平成24年8月現在、仮設のプレハブ研究室と民間に借用中のオフィスで業務をこなしている。福島などで甚大な被害を受けている人々に比べれば、さくら棟という仮設研究室も御殿のようなものである。被災した資料群は、一般には文化財と呼ばれるもので、一部は国費で既に修復が済んでいる。残った多くの資料も、日本が復興すれば、また修理もできよう。川北キャンパスの施設も徐々に修理されつつある中、2011年3月13日の朝、川北キャンパスにボランティアを志願して来た二人の工学部生、一人の女子学生のことを想うと、大学で最も大切にすべきは学生であることは言うまでもなく、できれば、川内北キャンパスの教育・研究環境を更に改善をし、若い学生たちが安心して勉学にいそしめる良い学習環境をとつくづく思う、ゴーヤの緑のカーテンがまぶしい今日このごろである。

編集者から研究・教育環境の近況をという依頼であったので、過去の回想を借用しつつ、今の東北アジア研究センターの状況、来る時への希望をやや乱雑に記した。



倒潰したペントハウスの内部



あの3・11から早くも一年半が経ち学内の大部分が外見上震災前の姿を取り戻しましたが、東北アジア研究センターは本拠である川北合同研究棟の耐震補強工事がようやくこれから始まるところです。一旦川内北キャンパスに戻ったセンター教職員と学生たちも秋の到来とともに再びあちこちに分散します。電車の窓から仮設住宅を見るたびにそこの人々の暮らしがしのばれます。
(柳田賢二)